

兵庫県南部地震災害救援医療チームに参加して

新井 克明*

Katsuaki Arai

レポート

1995年1月17日に起きた兵庫県南部地震。地震発生以後、次々に報道されるあまりに悲惨な映像に何かしなければと考え、とりあえず義援金を送ったものの、自分には他に何もしてあげられないジレンマがあり、救援活動の話が突然持ちかけられたのはそんな折でした。私の住む茨城県では、神戸に救援医療チームをいち早く送り出しており、茨城県立中央病院と私の所属する筑波大学附属病院とが5日間交代で担当していました。

1月24日に出発した第1班には薬剤師は含まれていなかったのですが、ぜひ薬剤師も必要だということで第2班から加わりました。第2班には県薬務課の長山さんが参加され、私は第3班で1月30日から参加しました。薬剤師がこのような第一線での救援活動を現地で行うというのは、今まであまり例がなかったと思われます。そこで、随筆風に今回の活動内容を報告したいと思います。

■ 1月30日 (月)

出発時の皆さんの声援に任の重さを改めて感じ、不安はありましたが覚悟を決めて出発いたしました。われわれのチームは、臨床医学系講師の永田先生、チーフレジデントの曾根先生、薬剤師の私、看護婦の加藤婦長・高梨婦長、管理課課長補佐の三浦さんの6人でした。往路は追加薬品や

医療材料等を積んで行く関係で、中型バス1台で行くことになり、首都高速の渋滞、関ヶ原の雪、中国自動車道の大渋滞にもめげずに約15時間後の午前0時にわれわれの目的地である避難所「平野小学校」に到着しました。平野小学校は兵庫区にあり、このとき約650人の方が避難されていました。学校の先生がここでの指揮を取られており、医療活動を行っている保健室に案内されました(保健室の先生は今回の震災で亡くなられたそうです)。今までの診療記録を見ながら軽いミーティングを行い明日に備えて休みました。

■ 1月31日 (火)

翌日、前任の県立中央病院のチームから業務を引き継ぎました。前にも書いたとおり、われわれのチームは県の救援チームとしては第3班でした。後から聞いた話では、第1班は診療場所が決まらず、野宿で移動しながら診療活動を行い、最後にここ平野小学校にたどり着いたとのことでした。しかし、われわれが引き継いだ時点では、第1班、2班の方の努力で診療方法等の業務の流れもすでに確立された状態でした。

学校の入口が狭く、バスは校庭に入ることはで

*筑波大学附属病院薬剤部



写真1 巡回診療に出発するところ：手前の自転車が今回たいへん役に立った。後ろが巡回診療車

きませんでした。台車を借り、校門から運動場を横切り校舎の入口まで追加の医薬品などの大量の荷物を運びました。なにしろバスの3分の2以上を荷物が占めていたわけですから、当然のことながら運び終わらないうちに診療となり、荷物は外の校庭の隅と廊下に置き去りのままとなりました。調剤の途中で外に走りダンボールをこじ開けて薬品を取り出し、また調剤するというようなことを何度も繰り返し、気がつくとき計はもうすでに午後1時をまわっていました。このとき、茨城県庁から医務課の渡引さん他3名、茨城県の保健所から保健婦の渡辺さん・稲葉さんの計6名が到着していました。遅い朝食(昼食)をとり、午後からは2時と4時からの2班に別れて巡回診療に出ることにしました(写真1)。私は、どちらの班にも同行することになりました。

まず、最初に「尊光寺」という寺の避難所では脱水状態にあったおばあちゃんにソリタT3顆粒をだしました。次に自宅でかぜをこじらせていたおばあちゃんのところへ行き、かぜ薬をだしました。(このおばあちゃんは長者番付の関脇だそうで、たいへんな長生きで104歳にもなるのだそう。娘も調子が悪いということで診察を受けましたが、娘といってもこのおばあちゃんの娘なの

で80歳くらいで、もうりっぱにおばあちゃんです。血圧が200以上にもなっていたので、アダラートで降圧を試みました。地震の時、この娘さんはおばあちゃんの横で寝ていて、もうだめだと思いながらおばあちゃんの上におおいかぶさったそうです。途端に娘さんの寝ていた上に食器棚が倒れてきて九死に一生を得たとのことでした。

次の避難所である「少年鑑別所」では、やはりかぜのおじいちゃんが診察を受けましたがだいぶ回復してよくなっていました。「夜、咳でうるさくて眠れないから、あのおばあちゃんをなんとかしてくれ」と寝ているおばあちゃんを指して回りの人たちが訴えました。このおばあちゃんは調子が悪くて寝ているのかと思ったら、どうも寝不足なのでこうして昼間寝ているようでした。本人の診察ではそれほどひどくはなく、本人がタバコを止めないで夜咳をしているので周りから非難的となっているようでした。避難所生活がもう2週間近くになり、ちょっとしたことで皆カリカリしてしまうのかも知れないと思われました。しかし、「タバコは止めるように」と指導をして救護所に戻りました。

隊長を曾根先生から永田先生にタッチして第2班は「荒田小学校」から巡回しました。ここは自

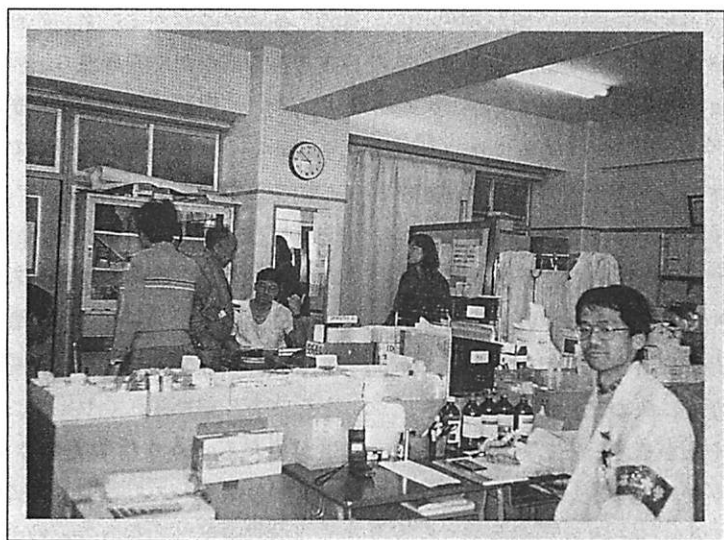


写真2 救護所での診療風景

衛隊が診療活動をしているということだったので、次の避難所に向かいました。次の「湊中学校」では、足をガラスで切ってけがをした男の子、かぜをひいた赤ちゃんを診察しました。赤ちゃんのお父さんとお母さんは外に出かけており、先生が抱っこしてあやしていました。本当に避難所の先生方はいへんだと同情しました。

平野の救護所には6時ごろ戻りました。薬品の整理をしようとする患者がきてなかなか落ち着いた状態でした。7時の診療開始時間になる前に食事を済ませてしまおうと皆で準備を始めたところ、また患者がやってきてそのまま診療となりました(写真2)。診療ではかぜの患者が多く栄養も足りないようでした。全員に総合ビタミン剤のようなものを処方したいと先生が言われたのですが、われわれの持ち合わせではなく、県庁から派遣の渡引さんたちに薬品の調達をお願いしました。薬品も救援物資と同様に全国から送られてきていて、これらの薬品は神戸のサンボウホールという所に集められており、ここから入手しました。これらの薬品の管理は、兵庫県薬務課と日本薬剤師会が中心となっており、ボランティアの薬剤師が仕分け作業等を行っていたようで、提供可能な薬品リストとその在庫数の一覧表が経時的に作成

されていました。このリストや薬品の入手は保健所を通して行われ、連日テレビで今回の地震の救援活動の連携の悪さが報道されているなかで、このような立派な組織的対応がなされていたのだと感心しました。全国に向けて不足薬品・過剰薬品の内容を経時的にここから発信し、偏りのない薬品収集ができればさらによかったと思いました。

そのためには、医薬品卸組合や医薬品メーカーの全国レベルの協力も必要になるかと思われます。今後災害対策のマニュアル作成時のよい参考例であることは間違いのないと考えます。

他にチラーヂンSの必要な患者が来ましたがこれはサンボウホールにも在庫しておらず、入手はできませんでした。「チウラジールは緊急性が高いけれどチラーヂンSなら2、3日間服用しなくても心配いらない」と説明し、近くの診療可能な施設へ行ってもらいました。

今日の診療で、患者が普段から自分の服用している薬をよく理解していることが重要であると強く感じました。被災者から「白い薬を飲んでいた」と言われても、主治医は死亡、カルテも薬も焼失しており何の薬か判りませんでした。また、災害によるノンコンプライアンスの危険性を強く感じました。服薬を急に中止すると危険な薬は、緊急

薬品として迅速に現地に供給する必要がある、また患者がそれを認識していることも重要なことと思われました。

小児のかぜ等も多かったので処方もフルコースで出され、予期していなかったシロップの調剤などですったもんだして戸惑いました。しかし、加藤婦長、高梨婦長の協力により何とか無事終了しました。「明日はそのままになっている荷物を整理して、調剤用の秘密兵器を取り出して効率よく作業を進めるぞ」と心に決めました。このとき、すでに時計は11時をまわっていました。

夕食は食べたような気もするし、食べなかったような気もするし、とにかく風呂もないのでもう寝ることにしました。昨日は救護所の床に寝袋で寝たのですが、今日は2階の図書室をわれわれに提供してくれました。図書室はとても広く、完全に冷えきっていました。救援物資の入っていたダンボールをつぶして床に敷き、その上に毛布2枚を敷いてさらに寝袋の上にも毛布を2枚掛けて寝ました。それでも軟弱な私には寒かったのですが、外で寝なくてよかったことに感謝しました。そして、体育館に避難している人たちは、「さぞ寒いだろう」と思いました。

■ 2月1日 (水)

翌朝6時前に目が覚めてしまったので、皆が起きる前に付近の状況を調べてみようと思いましたが、神戸駅まで歩いていく途中、ビルが崩れているところが何か所もあり、兵庫県薬剤師会と書いてあるビルも崩壊していました。来た道と違うコースで戻る途中、赤十字の救援部隊が準備をしているところに出くわしました。車のナンバーで遠方から来ていることがわかり、その中に土浦ナンバーがあったので話し掛けてみました。これから須磨地区に向かうところだそうで、お互い頑張りましょうと激励して別れ救護所に戻ってきました。

今日も朝食(パン)もそこそこに診療が始まっ

てしまったので、まだ薬品の整理ができないでいました。見かねて管理課の三浦さんと県庁の人たち、それに保健婦の2人が倉庫の薬品の仕分けを手伝ってくれました。おかげで非常にすっきりとして仕事がしやすくなりたいへん助かりました。

今日はしっかり午後1時から昼食となりました。カップ麺をゆっくり食べることができて久しぶりに食事をしたという感じでした。午後の巡回診療は留守番をすることにして、最後の薬品整理を行いました。これでやっと、なんとか普通に仕事ができるような体制となりました。小児のシロップの処方もスピーディーに調剤できるように特別な準備をし、薬袋の予製も作り、夜の診療に備えました。

巡回診療に同行していた保健婦さんが処方をもって帰ってきました。今日の巡回診療は連携プレーでやろうということで、まとめて処方し、後から届けるということになっていました。もう一方の班に同行した保健婦さんも処方をもって戻ってきたので、まとめて調剤し二手に別れて届けにいきました。薬を届けた帰り道で、歩道橋の階段で苦しそうにうずくまっているおばあちゃんを見つけたので声をかけました。話を聞くと弟が交通事故にあったが病院で断られて家で寝ているとのことでした。昨夜心配で寝ておらず、長い道のりを歩いて会いに行ってきたので気分が悪くなったようでした。「ゴホゴホ」とひどい咳もしていたので一緒に救護所に行くことを勧めましたが、まだ近くに用事があるというので、それが済んだら来るように場所を教えてわれわれは戻りました。

かぜの患者が多く、避難をしている人たちがみんな咳をしているので、うがい薬の在庫が不安になりました。そこで、イソジンガーゲルの希釈予製を作ることを永田、曾根両先生に了解してもらいました。具体的には、イソジンガーグル3mlを90mlに希釈したものをカップ付きの容器で出すというものです。これで1人にイソジンを3mlしか使用しないでよくなり、そのままうがいできる

ので避難している人たちにとっても使いやすいといったメリットが生まれました。また、**集団生活**では**予防が最も重要だ**と考えオラドル含嗽液も希釈調製しました。看護婦さんが、これを**各流し**に配置してくれました。このことが、この**避難所**で**一気にかぜが終息した**ことと多少なりとも関係していると考えています。しかし、何といたっても避難所中を蔓延していたかぜを一気に終息させたのは曾根先生の強制的かつパワフルな診療にほかなりません。家も家族もなくし診療を受ける気力もなくしているような老人に対しても精力的に向かっていき、容態の悪い患者を発見して先手必勝の診療をした功績は大きいと思います。

巡回診療を行っている避難所「尊光寺」の住職が感謝の気持ちだと焼き芋を持ってきてくれました。救援物資で届いた芋を住職が焼いて皆にくばっていたのです。これとカップやきそばが夕食となりました。ところが、みんなで食べようとお湯を注いだところへ、また例のごとく患者がやって来て、夜の診療にそのまま突入しました。昨日同様、患者が保健室いっぱいとなりましたが、今度は準備万端手際よく調剤することができました。昨日の患者の傾向から予測し、先に書いたイソジンガーグルの予製の他にマーロックスなども30ml×3日の約束処方とし、昼間に予製しておきました。

「インフルエンザの予防接種をしてもらえますか」という患者がきましたが、やっていないといって断りました。新聞に“兵庫県が何カ所かの避難所で予防接種を行う”という記事があり、これを見て尋ねて来たようでした。それを聞いた曾根先生が、「避難所ではそこら中でかぜをひいているんだから、今かぜをひいてない人は予防接種なんか必要ないよ。」と言。また、「目に激痛が走った」と言う患者が来ましたが、専門でないので近くの眼科医院を探し紹介しました。しばらくして戻ってきて、目に傷があったけれど異物はすでに取れていたそうでした。

隣の避難所の「荒田小学校」からわざわざ患者

が来ました。その老人の話によると、荒田小学校では水が出ないので、プールから水を運んだり、トイレ掃除をしたりとかの仕事を順番でしているそうです。老人が多く皆かぜをひいているので、調子がちょっと悪いくらいでは仕事を免除してもらわねはいかないから、皆無理をしてかぜをこじらせていると言うのです。われわれの資料では、荒田小学校は自衛隊の医療班が診療活動をしていることになっていましたが、近々撤退する予定と聞いていました。そこで、永田先生が明日様子を見に行くということになりました。

最後の患者さんの点滴が終わり送り出して時計をみるとやはり今日も11時になっていました。最後に診療記録や集計を看護婦さんたちが行い、軽いミーティングをして休みました。

■2月2日 (木)

翌朝、配給されたパンを食べてくださいと差し入れされました。昨日診察にきた患者の中に食料隊長がいたようで、一度は断ったけれど「パンがあまったのでぜひ食べてくれ」と言うのでありがたくいただきました。

永田先生は「荒田小学校」に自衛隊の医療班の撤退時期を確認に行きました。明日から慈恵医大が引き継ぐとの情報が入ったので、もう安心だろうということになりました。

「尊光寺」の住職が火傷でやって来ました。炊き出しなどで地震からずっと被災者の面倒を見てきて疲れが出たようでした。また、ノボベンⅢを破損したというおばあちゃんに来て、使い方を教わって帰りました。避難所にずっといるのは入院しているようなものだから細かいケアができる、ついでに食後と空腹時の血糖値も計ることになりました。なるほどと思いました。震災時に**応急処置的に傷口を縫ってあった所が、そのままにしておいたために膿んでいる患者**なども来ました。このような患者は、**一段落したこれからが増える**と考えられます。



写真3 平野小学校内の巡回診療：避難所の体育館で患者さんと

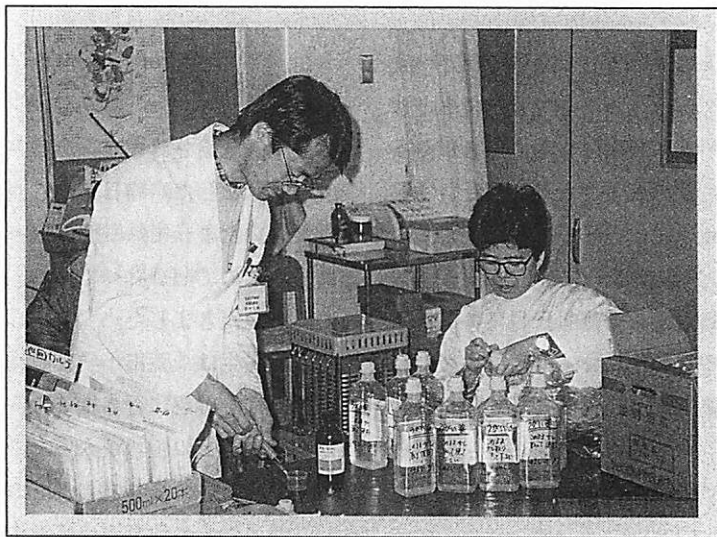


写真4 オラドール含嗽液の調製風景

やっと息をつく暇ができたので、薬剤部に電話を入れました。茨城県の医療チームは縮小されて交代の薬剤師は日本薬剤師会から派遣されて来るとの情報を受けました。

今日のご飯が食べたいと主張したところ、持ってきたレトルトのご飯は避難所に全部あげてしまっていないといわれ、私はショックを受けていましたが、曾根先生がここに来る途中の米屋でタイ米を入手してきており、腕の見せ所だといって鍋

でごはんを炊いてしまいました。私は感動して、「うまいうまい」とレトルトカレーと牛丼を2杯もたいらげてしまいました。やっぱり日本人はごはんです。

午後一番で平野小学校内の巡回診療を行い私もそれに同行しました(写真3)。犬と一緒に避難所暮らしをしているおばあちゃんや、他人の子供を孫のように面倒みているおじいちゃん、人から施しを受けるのは嫌いだと言っているおばあちゃん

が、「困ったときはありがたうと言って貰うことは少しも恥ずかしいことじゃないんだから」と说得されている光景など、人も犬も老人も子供も、皆で助け合って暮らしている様子が非常に感動的でした。出された処方箋を保健室に持って帰り調剤して、再び服薬指導も兼ねて届けに行きました。小学校内を巡回してみてもオラドール含嗽液の人氣があり、ずいぶん減っていることがわかりました。そこで今日の外の巡回診療は留守番をすることにして、オラドール含嗽液を調製しました(写真4)。高梨婦長にも協力してもらい、今度は職員室に持って行きました。日中は外にでている人もいたので、夜になってから必要な人全員に行き渡るようにアナウンスして配ってもらいました。

「すぐ裏が実家なのでこちらに1週間ほど戻って来ています。何かお手伝いさせてください。」と聖マリアンナ医大循環器科の長嶋先生が来られました。そして、明日より医師が1名になるので巡回診療のときにいてもらうことになりました。

午後3時30分頃、後任のメンバーが全員到着しました。薬剤師は、千葉県富岡調剤薬局の宇田先生でした。とりあえず、外の巡回診療を引き継いでもらおうと後任のメンバー全員外にでかけてもらいました。

相変わらず、ランダムに患者は来ていましたが、その日はメンバーも増え薬剤師も2名となり、はじめて落ち着いて夕食をたべられました。しかも、この小学校の初めての炊き出しの豚汁もごちそうになり、美味しくて感動しました。

診療終了後、全員で引き継ぎのミーティングを行いました。避難所にいるのは弱い立場の人たちであることを理解して、できるだけことはしてあげたい。しかし、永久的に救護所を続けるわけにはいかないの、医療施設の回復状況を見て今後段階的に地域の医療に戻していく努力が必要であろう。」といった今後の対応などが話し合われました。落ち着いて全体を把握しまとめる永田先生、人あたりのよさでどんな心理状態の患者にも溶け込むやる気120%の曾根先生、いろいろな

ことをてきばきと効率よくこなす両婦長、それをサポートした保健婦の2人、それに今までこのようなチームには存在しなかったと思われる薬剤師の私、事務関係の三浦さん、保健所の連絡など行政関係は県の渡引さんたちと完璧なチーム構成だったと終わってみて感じました。

■2月3日(金)

翌朝、帰り支度をして午前9時に救護所を後にしました。永田先生、曾根先生と私は、被害状況と避難所の現状視察を目的に徒歩でJR須磨駅まで歩きました。

道にはそこらじゅうにゴミの山が溢れていました。湊川公園に行くくと大勢の人たちが列を作っており、衣類が配給されるのを待っていました。隣ではプレハブの仮設住宅の建築が始まっており、反対側では融資の相談所にやはり人が溢れてごった返していました。上沢通りに出ると道の両側のビルのほとんどすべてにヒビが入っており、完全に破壊されているものもかなりあり、また木造の家屋は全壊していました。少し行くと景色が開け焼け野原となっていました。真ん中に「中山病院」というビルが黒こげになって立っており、あまりに現実離れした光景にわれわれはしばらく立ち尽くしてしまいました。先もずっとこんな光景の連続でした。通りの両側には警視庁の車両がはるか先まで何台も駐車していました。一本南側を通っている国道28号線に行くために路地に入るとそこは大通りにもまして目茶滅茶に崩壊しており息を呑みました。

「会下山小学校」という避難所があったので中に入ってみるとそこは惨憺たるものでした。戦争映画の野戦病院のような光景で、入口のドアを開けると廊下の両脇には被災者の布団が所狭しと敷いてあり、踏まずに通行するのがやっとといった状態でした(写真5)。寝ている老人がところどころで咳込んでおり、水が出ないためか消毒の匂いがたちこめていました。土間、階段の踊場、トイレ

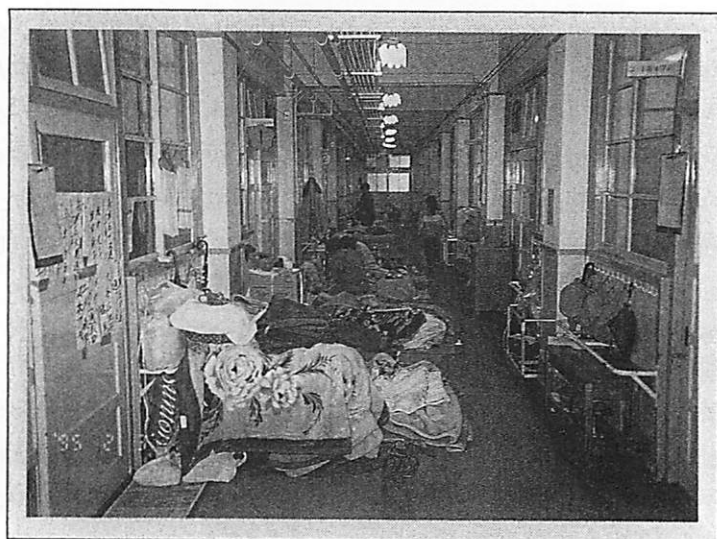


写真5 会下山小学校の避難所：階段の踊り場や玄関の土間、トイレの入口にまで布団が敷いてあった

レの入口にまで布団は敷かれており、それでも屋内に全員入りきれず、グラウンドも被災者であふれていました。外のテントは小学校の椅子にレジャーシートを巻き付けただけというような貧弱なものが多く、隙間だらけでとても寒さをしのげるような代物とは思われませんでした。「一体これは何なんだ！」怒りが込みあげてきて抑えきれませんでした。ここの診療は、宮城県の東北大学の先生たちが行っておりまして。なにかわれわれにできることはないかと申し出たところ、「今、必要なのはここの被災者の生活環境を改善することです。患者に温かくして休みなさいと言えない。このままでは皆肺炎になってしまう。医療以前の問題です。薬も器材も持っているが、一番ほしいのはウレタンマットとシュラフです。」と話されました。この言葉と今見ている光景は、つくばに帰る途中もずっと頭に焼きついて離れませんでした。われわれの避難所には毛布は沢山あったのに、毛布は足りているのだろうか？ われわれはこんなに避難所間の格差があったことに大きな衝撃を受け、しばらく無言で瓦礫の中を歩いていました。

国道28号線の大開というあたりでは大きな道路の中心部分が100m以上に渡り陥没していました。この下には地下鉄が通っており、そこにめり込ん

だ状態でした。道路わきの小さな公園もテントが張られており、ここも小さな避難所となっていました。近くに「水木小学校」という避難所があり立ち寄ってみました。ここは自衛隊が入っていましたが、水が出ず、先ほどの「会下山小学校」と同様に廊下にまで被災者が溢れていました。救護所は姫路市の医師会が交代で行っていました。廊下で布団に寝ているおばあちゃんに、もっと環境のよい別の避難所に移るのはどうかと尋ねたところ、面倒だからこのままでよいという返事が返ってきました。多少環境が悪くても気の知れた近所

どうして助け合って生活するほうがよいらしいのです。われわれは人数の減った避難所に人を移動させて避難所の平均化を図れないかと考えましたが、被災者の対策は人を対象にしているためにそう機械的にはいかなようです。せめて状態の悪い患者だけでも、われわれが使っていた平野小学校の図書室に移してあげたいと強く思いました。これは県や国など上のほうの役目かもしれませんが、そこまで気がまわらないのが現状でしょう。保健所が避難所の救護所と密に連絡を取り合い対応してくれたらと思います。

少し行くと病院の5階部分が潰れた西市民病院にぶつかりました。病院前の歩道橋は上る階段も



写真6 長田地区：アーケードの商店街が火災で跡形もない

下りる階段も途中から崩れて、真ん中の橋だけが宙に浮いた形で残っており、不思議な光景でした。病院の入口では係員が忙しそうに対応に追われており、「この病院では診療できません。他の医療機関に行ってください。」という内容の貼り紙がされていました。しかし、どこに行ったらよいかわからない患者らしき人たちがあとからあとから訪れていました。

しばらく行く道の両側は家屋が全滅状態でしたが、もうわれわれの感覚も麻痺してそれが当たり前風景のように感じられていました。この辺は火事で黒こげの場所がかなりありました(写真6)。新長田や鷹取という駅は閉鎖され、駅前には焼け野原で立ち入り禁止でした。しかたなく、次の須磨駅までさらに歩きました。その途中は本当に広大な一郭が焼け野原で、まるで戦争で爆撃を受け焼け野原となったといった状態で、われわれも足を止めてしばらく立ち尽くしてしまったほどです。筑波に戻ってから、この場所と思われる光景が何度もテレビで放映されているのを見ました。

焼け野原の中で何か探しているのか線香でも焚いているのか、親子と思われる3人が見え、それを外国のテレビカメラが写していました。曽根先生がその中の一人に話しかけるとアメリカの

CNN だか NBC だか、何でも大きなテレビ局だそうで、われわれも取材されることになってしまいました。永田・曽根両先生は今見てきた生々しい現状やどうしようもない気持ちを、言葉は抑え気味でしたがキャスターに強く訴えていました。

須磨駅に着いた時にはもう午後1時をまわっていました。平野の救護所を出てからすでに4時間も経っていました。ここでやっと JR に乗り神戸駅まで戻りました。三ノ宮では食べるころもないだろうと、ここで喫茶店に入ったのですがカレーライスが2時間待ちで、いちばん早いお弁当を頼んで昼食にしました。今、余震があったらここも潰れるだろうかなどと思いながら、高速神戸駅から勇気を出して地下鉄に乗り(反対方向は先ほど見てきた道路が陥没して潰れた大開駅)三ノ宮まで行きました。電車の中で、関西弁のおっちゃんが「明石海峡大橋のボーリング工事が活断層に刺激を与えたんや」ともっともそんなことを話していました。三ノ宮の駅前は大きなビルがすべて壊れており、「そごう」は真つ二つに割れて一階部分はぺちゃんこ。神戸新聞のある大きなビルは窓ガラスがすべて割れていました。駅の反対側では日本生命のビルの途中が潰れてブラインドがトコロテンのようにみ出していました。この辺り

をよく知っている永田先生には信じられない光景のようでした。

ここから、阪急の代替バスの乗り場へ向かいしました。そこには人がごった返しており、さながら連休のディズニーランドに行ったようでした。「最後尾はここです。」などという看板を持った人が遙か後ろにいてそこに並びました。しかし、バスの回転は早く、20分位の待ち時間で乗ることができました。ここから青木（おうぎ）駅までの車窓の景色も破壊されたビルがずっと続き、倒れた高速道路はもうすでに小さなコンクリートの破片に崩されていました。青木駅の近辺も住宅がそこらじゅう崩壊しており、そこから梅田まで電車で行く景色もずっと同じような光景でした。所々で小学校と思われる避難所が見え、被害の範囲の広さに驚かされました。車窓の景色を見ているうちに、避難所で小学校の先生が、夜中に生徒一人一人に電話をかけている光景を思い出していました。「○○ちゃん、元気でやっている？ 先生も頑張っているからね。○○ちゃんも頑張るんだよ。」避難所でも瓦礫の中でもそんな気持ちにはならなかったのに、なぜだかわかりませんがむしろ悲しくて涙が止まらなくなっていました。帰りたいと本気でおもいました。みんな戦っているのに自分だけ逃げてしまうようで、無性に後ろ髪を引かれました。

梅田まで来るとさすがに被害は見られなくなりました。駅前で災害特別法の人権が云々というビラを学生が配っていました。新大阪まで行き、ほとんど待ち時間なしで新幹線は出発しました。駅

で買った弁当を食べながら一っと外の景色を眺めていました。何だかとても綺麗すぎるような気がして変でした。

東京に着いて八重洲のバス停に行くと、つくばセンタービル行きのバスが出発する寸前だったのでそれに飛び乗りました。東京駅や大丸のビルのガラスが割れていないのが不思議だという錯覚がまだ覚めず、高速から見えるビルもどうして壊れていないのか不思議でした。近い将来、東京でこのような大震災が起こった場合には、私が今見ている景色が確実に今日見た神戸と同じになると確信しました。今日一日はあまりにもいろいろなことがあり、これは現実なんだということを忘れてしまいそうで、バスに乗っている間中、もう一度朝からのことを思い出していました。

今回、大勢の人たちからありがとう。ありがとう。と何度も感謝されましたが、本当は私のほうこそ神戸の人たちにありがとう。ありがとう。と何度も言いたいくらいだと思いました。神戸の人たちに人間も捨てたもんじゃないんだということを出させてもらい、何だか私も性善説を信じられるような気がしています。私は、筑波に帰ってまたいつも通りの生活となりましたが、雨が降ったり、雪が降ったりするたびに寒くてたいへんだらうと神戸のことを考えてしまいます。

最後に、業務の忙しいなか医療救援活動をする機会を与えて下さった小磯謙吉病院長、相良悦郎薬剤部長、後方支援をして頂いた病院のスタッフの方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。